

Do Attitudes toward the Part Time Job Make Differences in GPA?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡部, 博志, 積田, 淳史, 宍戸, 拓人 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/474

大学生活に占めるアルバイトと 学修成果との一考察

渡 部 博 志
積 田 淳 史
宍 戸 拓 人

1. はじめに

本稿は、大学生の学生生活と学修成果との関係について、その実態から考察を加えるものである。具体的には、大学生の学修成果として一般的に広く大学で使われている指標である GPA (Grade Point Average) を用い、アルバイトを中心とした学修成果との関係が想定される学生生活にまつわる変数を取り上げ、定量的に分析することを通じて実態を把握し、考察を行う。

学校教育法において、大学とは「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ」(学校教育法第 83 条)、その実現のために教育研究を行い、成果を広く社会に提供することによって社会の発展に寄与するものとされている。このような法律の規定をひくまでもなく、大学は、教育機関として高い資質能力を有する学生が輩出されることを社会一般から期待されている。たとえば経済同友会が 2015 年に発行したレポートでは、学生を採用する企業の立場から、大学が担う役割として特に教育に対する期待が大きいことが記されている。

大学の側も、社会からの要請に応えるために様々な施策を講じており、教育改革の取り組みの中にもその一面をみることができる。4 学期制の導

入は留学機会の拡大として、進級や卒業の要件としての GPA 活用は卒業生の質の保証として、それぞれ導入する大学が増加しており、これらは社会的要請に応えたものだと捉えることもできる。もちろん、いずれも導入に対する賛否や批判的検討がなされている施策ではあるものの、GPA は大学の認証評価や学生の就職先など外部証明のため故に利用されているという大塚・山田（2012）の指摘は、大学教育に対する社会的要請への大学の対応として理解することができよう。

このように大学への社会からの期待に対し、大学側も教育を通じて学生が高い能力を身につけるための試みを行ってきている。しかしながら、最終的には学生本人の学習への取り組みそのものがなければ、卒業生 1 人 1 人の能力向上は達せられない。もう少し広く捉えれば、学習を含む学生本人の学生生活における態度が、学修成果や資質能力の形成に大いに影響するということである。

このことは、試みられる様々な手法や制度は、それが応用される実際の学生の理解に基づいてなされていなければ、実際の能力向上に寄与しない可能性があるということである。換言すれば、他の大学に導入された施策が必ずしも機能しないことも大いに考えられるのである。大学教育への一般論として指摘される問題点に対して導入される施策が、実際に適用される学生にとって有用かどうかを検討されることなく導入されるならば、場合によっては社会にとっても大学にとっても、そして学生にとっても、損失を生み出すかもしれない。しかも、同じ大学の中でも、専攻する領域が違うことで施策の有効性が異なる可能性もある。例えば、資格取得が将来の職業と結びつく領域に入学した学生と、漠然とした将来像を描く程度で入学してきた学生の多い領域では、学修に対する態度や教員に対する態度が異なるであろう。更に言えば、入学時点と専門性を深めていく最終学年とでも、学修への取り組みに違いが見られるであろう。

したがって、教育機関としての大学が、社会的要請も含めて学生の能力向上に寄与するためには、学生の実態を把握することが不可欠であるよう

に思われる。中室（2015）が述べているように、より高い学修成果をえるための施策を検討するためには、実態をつかむ必要があるはずである。近年ではIR（Institutional Research）が大学における情報収集という当初の領域からの活動範囲を拡げ、教学面での強化を図って修学支援の役割を担うものも見られるようになってきているが、これは取りも直さず学修面における学生の実態把握を基盤とする動きである。

筆者たちは、自らの所属する学科の学生の実態を理解するために、一昨年より独自に質問票調査を実施してきている。質問票調査の結果については、その一部をすでに学術的な面から国際学会で発表¹を行うと共に、学内においても学修実態という面から発表をしてきている²が、本稿では冒頭に記したように、大学生の学修成果指標として一般的なGPAを用いて、学生生活にまつわる変数との関係を定量的に分析することを通じて実態を把握し、考察を行う。

なお、本稿は定量データを用いたものであるものの、探索的に学生の実態について検討を加えるものであるため、分析はアドホックなものである。しかし、データを分析することで見いだされる実態には、大学生の学修成果をより深く検討する上で有用な知見が含まれると思われる。

以下では、まず、本稿で特に着目する、大学生の生活に占めるアルバイトについて取り上げて、続いて、筆者たちが実施した質問票調査について概要を述べる。学生の特徴を表すものとして本稿で取り上げる変数について説明した後、学修成果とアルバイトを主とする学生の特徴を表す変数との関係を、統計分析の結果を示しながら整理し、最後に調査分析を通じて得られた実態について考察する。

2. 大学生生活におけるアルバイトの位置づけ

前項で述べた大学生の資質能力を念頭に置くと、その向上が大学の授業を通じて達成されると仮定すれば、大学で良い成績を取ることために

「しっかり」学ぶことが求められるはずである。一般的には学習時間が「しっかり」学ぶことの代理変数として用いられ、学習時間が長いほど成績が良くなるという関係を想定するであろう。

しかしながら、これまでの研究では、大学での成績と学習時間との関係は必ずしも明確ではなく、両者の間に見いだされている関係は統計的には非常に弱いものである（たとえば、Gortner Lahmers & Zulauf, 2000；Schuman et al., 1985）。筆者たちが2014年度に実施した学生の実態調査においても、アルバイトが学修成果に及ぼす影響を明確に見いだすことはできなかったが、週に4日以上アルバイトをする学生はGPAが平均を下回る傾向が見られ、また1日あたりのアルバイトが5時間を超えると、4時間程度にとどまる学生に比べてGPAが低い傾向は見られた。ただし、1回あたりのアルバイトが2時間以下の学生は相対的にGPAの低いことも示され、この学生たちは、Wang & Halcombe (2010) が示すように授業で上手くいくように一生懸命に取り組むといった Behavioral Engagement が他の学生に比べて弱い傾向にあることも明らかになった³。

Plant et al. (2005) では、日々のやるべき一覧 (To-Do List) ではなく、それよりも長期的な計画が組まれている場合には、学習時間は大学での成績との間に統計的に有意な関係があることを示している。このことは学習時間と計画性との間に関係があることも示している。

計画性が学習時間と関係する理由を考えれば、私たちが1日に有している時間が24時間に限られていることを挙げられよう。授業以外の時間を大学生が自由に配分できるとすれば、授業外での学習に充てるだけでなく、サークル活動やアルバイトに時間を費やすことができる。Plant et al. (2005) では、回答者に対して1週間あたりの学習時間を尋ねる際に、アルバイトの時間とパーティーに参加した時間の回答も求めており、アルバイトの時間はGPAと有意な負の関係を示している。また、Ratelle et al. (2005) は、勉強との間にコンフリクトを生じさせる余暇 (レジャー leisure) の存在を捉え、余暇活動の存在によって学校での勉強に支障が出

る程度を勉強と余暇活動とのコンフリクト (School-Leisure Conflict) として変数化し、同変数の値が高いほど学修成果が低いという関係を示している。渡部・積田・宍戸 (2016) においても、勉強と余暇活動とのコンフリクトは、GPA で捉える学修成果に対して負の影響がある要因であることが統計的に示されている。

学生が自由に配分できる時間を所与とすれば、アルバイトに費やす時間を増やせば、必然的に学習に与える時間が短くなることになる。特に日本においては、大学生の学習時間が海外と比べて非常に短いことが指摘され、文部科学省の中央教育審議会の中でも議論されているが⁴、学習時間が問題とされる際には学生によるアルバイトが特に問題視されているように思われる。近年、大学の授業への導入が提言される双方向型授業や反転学習といった手法は、学習時間を増やす方策の一つという位置づけがなされることも少なくない。

学習時間という観点からは否定的な側面が強いアルバイトであるが、必ずしも否定的な側面のみが存在するわけではない。社会化の側面や労働経験の蓄積という金銭的なもの以外でのメリットも挙げられている。三保 (2013) は、学生のアルバイトに対する考え方が大学での学習に対する態度や志向性に与える影響について検討を加え、アルバイトに対する肯定的な評価は大学での学習における積極的姿勢に影響することを示している。具体的には、アルバイトに社会的機能があると肯定的な評価をアルバイトに対して与える学生ほど、大学での勉強を主体的に学んでいこうとする態度が強く、大学の講義を受けていればよいという受動的な態度が弱いことを明らかにしている。それに対して、アルバイトは小遣い稼ぎの手段であると捉える学生ほど学習に対する受動的態度が強く、大学の勉強は単位を取り卒業するためのものだという学習観が強いことを分析結果から述べている。

それ故、学修成果を検討する上では、アルバイトに費やす時間以外の要因も影響を与えると考えられる。そこで本稿においては、筆者たちが実施

した独自の質問票調査を通じて得られた、大学生のアルバイトに対する考え方を取り上げる。同時に、社会に人材を輩出するという観点から、学習に対する学生の捕まえ方とともに、学生自身が自らの将来像をどの程度描いているのかについても考慮に入れ、学修成果との関係を見ていくこととする。

これらの各変数についての詳しい説明は、次項で改めて述べることとするが、概要をここで示すならば、学生がアルバイトで直面する問題を設定し、それに対する回答を通じてアルバイトに対する考え方を把握する質問項目を筆者たちが独自に作成しており、これをここでの分析で用いる。学習に対する態度ならびに自らの将来像の明確さについても、筆者たちが独自に質問項目を作成し、勉学を本分とし自己の資質能力を高めるべき大学生が卒業後を見据えて大学生活を送っているのかを、把握された実態を示しながら学修成果との関係を検討していく。

3. 学修成果の推移と学生の特徴

ここまで学修成果と関係を持つことが想定される事象を取り上げ、説明してきた。以下では、まず筆者たちが行った質問票調査の概要を説明した上で、各変数について説明し、続いて分析結果を示す。

(1) 質問票調査の概要

学修成果との関係を捉えるための学生生活の特徴は、筆者たちが独自に企画し実施した質問票調査の結果を用いる。この質問票調査は、大学生の学修と生活の両面について実態を把握する目的で、筆者たちが所属する経営学科の全学生を対象に行っている。2014年度に続き2015年度には質問項目の一部を入れ替えて実施しており、本稿では2015年度の調査結果を用いた分析を行う。

「学修・生活の実態調査」と題するこの質問票調査は、2015年11月26日

から2016年1月7日の約1ヶ月半にわたって実施した。調査全体での有効回答は532名分、回答率は68.2%であった。ただし、1年生については、他の学年と就学キャンパスが異なり、また冬休み明け初日に実施したため、回答率が25.4%にとどまった⁵。したがって、1年生を対象とする分析の解釈にあたっては、この点を留意する必要がある。1年生を除く各学年の回答率は高く、同一キャンパスに所属する2～4年生の回答率は85.3%にのぼった。なお、本稿では全て同じ選択肢を選ぶなど明らかに真剣に回答していないと判断できる1名の回答は除外し、最終的に531名の回答を分析の対象とする。

本調査の工夫として、任意ではあるが学籍番号および氏名を記名させたことと、教員と同じ空間で回答させたことを指摘できる。これらの工夫は、GPA等の質問票外のデータと統合して分析するねらいと、学生にしっかりと回答してもらいたいという狙いがあった。GPA等のデータを関連させて分析することは事前に学生に説明したが、回答した全学生が記名に応じた。また、上述の通り真剣に回答していないと思われる学生はごく少数であった。

(2) 変数

【学修成果】

学修成果としては、近年多くの大学でGPA (Grade Point Average) が一般的に利用されている。これは、授業科目の評価を数値化し、在学中の成績を平均値として示すことで学修成果を客観的に把握するものである。本学の場合、授業科目における成績評価は、高い方から順にS、A、B、Cという4段階であり、これに加えて不合格評価がある。この成績評価を高い順にそれぞれ4点、3点、2点、1点、不合格は0点として、この点数を各科目の単位数で加重平均したものがGPAである。なお、以下に挙げる各変数は、回答時点の回答者自身に関して尋ねているものであるため、入学時点からの累積(通算)GPAではなく、質問票調査を実施した2015

年度の単年度 GPA の値を用いる。また、その GPA の学年平均値は学年間で異なるため、回答学生毎に所属学年の平均 GPA からの偏差を計算した値を分析では用いている。

【アルバイトに対する考え方】

三保（2012）が示しているように、大学生のアルバイトに対する考え方が学習に影響を及ぼすと考え、筆者たちは独自に質問項目を作成した。アルバイトについて述べた5つの文章のそれぞれについて、学生自身が自分の考え方にどの程度あてはまるのかを7点尺度（1：まったく違う～4：どちらも言えない～7：まったくその通り）で測定し、以下の分析においては各質問に対する考え方を「否定的」「中立的」「肯定的」と大きく3つに分けたものを用いる。「否定的」には7点尺度で1あるいは2と回答したものを、「中立的」には同じく3～5の回答を、そして「肯定的」には6ないし7を回答したものをそれぞれ当てはめる。

具体的な5つの質問項目は、表1に示す通りである。これらの質問では、大学生が実際のアルバイトにおいて直面するであろう状況を問うことで、実態に沿った形でアルバイトに対する学生の考え方を把握することを意図している。なお、各質問項目が実際のアルバイト状況を想定していることから、回答にあたっては回答時点において3ヶ月間全くアルバイトをしていない学生は、各項目について回答しないよう指示している。

表1 アルバイトに対する考え方

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① アルバイト先から、急なシフト変更の願いをよくされる② アルバイト先から何か頼まれると、断りづらく感じる③ アルバイト先で、頼りにされていると感じる④ 場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと感じる⑤ 試験前には、アルバイトの予定を入れないようにしている |
|---|

【学習と将来像】

社会に人材を輩出する教育機関という観点から大学を捉え、学生自身が自ら描く将来像についても考慮に入れて学修成果との関係を見ていくために、回答者である学生に対して卒業後を見据えた大学生活を送っているのかを問うた。本稿の分析で用いる具体的な質問項目は表2に示す2つであり、筆者たちが独自に作成した項目である。アルバイトに対する考え方を尋ねたときと同様に、回答者である学生が自分自身にどの程度あてはまるのかを7点尺度（1：まったく違う～4：どちらも言えない～7：まったくその通り）で尋ね、各回答をもとに「否定的」「中立的」「肯定的」と大きく3つに分けた。

将来を見据えて授業での学習に取り組んでいるのか否かの実態は①を通じて、そもそも将来を見据えているのかについては②を通じて把握することを意図している。

表2 学習と将来像

<p>① 将来に必要な技能や知識を身につけるために、授業に取り組んでいる</p> <p>② 近い将来について、自分には具体的な理想がある</p>
--

(3) 分析結果

表3には各変数の平均値ならびに標準偏差が、回答者全体のものと回答者の学年別のものとに分けて示している。学年別の値を示した理由は、学習への態度や将来像の明確さが学年と共に変化している可能性を確認するところにある。

表3のGPAについて多少の補足をすれば、本調査は悉皆調査を意図しているため、全学生が調査に参加すればGPAの平均値はゼロになるはずであるが、調査日に欠席した学生が存在するためにそれがゼロとなっていない。

学年別の値に見られる特徴的な点としては、アルバイトに対する平均的な考え方については、学年が上がるほどアルバイト先で頼りにされている

と感じるようになる（項目③）という点を指摘できる。調査時点において多くの4年生が卒業後の進路が確定していることから、その4年生を除いて1～3年生に着目すれば、学年が上がるにつれて、試験前にアルバイトの予定を入れないようにする程度（項目④）が下がっているという実態がありそうである。このことは、アルバイト先で頼りにされていると感じることと関係があるかもしれず、アルバイト先で何か頼まれると断りづらく感じる（項目②）程度が高まり、アルバイト先から急なシフト変更をお願いされる（項目①）ことが増えたりすることとも呼応しているように思われる。実際にこれらの関係は、各変数間の相関をまとめた表4で確認することができる。

表3 変数の基本統計量（平均値・標準偏差）

	全体	1年生	2年生	3年生	4年生
i GPA（2015年単年度） ※学年毎の平均値からの偏差	0.075 (0.546)	0.123 (0.483)	0.068 (0.531)	0.059 (0.560)	0.082 (0.584)
① アルバイト先から、急なシフト 変更のお願いをよくされる	4.017 (1.913)	3.674 (1.910)	3.804 (1.932)	4.301 (1.907)	4.167 (1.852)
② アルバイト先から何か頼まれる と、断りづらく感じる	4.376 (1.991)	4.543 (2.019)	4.363 (1.982)	4.376 (2.084)	4.324 (1.899)
③ アルバイト先で、頼りにされて いると感じる	4.838 (1.482)	4.500 (1.502)	4.646 (1.459)	4.865 (1.613)	5.274 (1.239)
④ 場合によっては、学習よりアルバイ トを優先しても仕方がないと感じる	3.760 (1.815)	3.804 (2.007)	3.514 (1.784)	4.008 (1.828)	3.843 (1.736)
⑤ 試験前には、アルバイトの予定 を入れないようにしている	4.968 (1.891)	5.304 (1.848)	4.972 (1.996)	4.750 (1.904)	5.083 (1.697)
① 将来に必要な技能や知識を身につ けるために、授業に取り組んでいる	4.911 (1.366)	5.411 (1.372)	5.081 (1.181)	4.738 (1.402)	4.633 (1.500)
② 近い将来について、自分には具 体的な理想がある	4.428 (1.709)	4.268 (2.005)	4.215 (1.617)	4.430 (1.772)	4.820 (1.580)

①～②は7点尺度

上段：平均値・（下段：標準偏差）

将来像と学習への姿勢に目を移せば、将来に必要な技能や知識を身につけるために授業に取り組んでいる（項目①）という回答値が、学年が上が

るほど小さくなっている。このことの解釈はいくつかあり得よう。その中で1つ考えられることとしては、経営学という領域が多様な内容を包含していることが関係している可能性である。学年が上がるほど、それまでに取り組んだ学習を踏まえ、自らがより専門的に知識を深めたいと考える領域とあまり得意ではない領域とが明らかになってくることが考えられる。カリキュラム上も、プレゼミやゼミといった特定の興味関心をもつ指導教官の下で学ぶことになる。しかしながら、特定の領域に対する一般の講義科目はさほど多く開講されるわけではない。その結果として、経営学科の科目であっても全般的に捉えれば、自らが深めたい専門的な領域でないことが多くなるので、将来に必要な技能や知識を身につけるために授業に取り組むということが相対的に少なくなることが考えられる⁶。

表4 変数間の相関（ピアソンの相関係数）

	i	①	②	③	④	⑤	①	②
i GPA（2015年単年度） ※学年毎の平均値からの偏差	-							
① アルバイト先から、急なシフト変更のお願いをよくされる	-0.034	-						
② アルバイト先から何か頼まれると、断りづらく感じる	0.019	**	-					
③ アルバイト先で、頼りにされていると感じる	-0.085	**	**	-				
④ 場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと感じる	**	**	**	**	-			
⑤ 試験前には、アルバイトの予定を入れないようにしている	0.145	-0.003	-0.058	-0.041	-0.170	-		
① 将来に必要な技能や知識を身につけるために、授業に取り組んでいる	**	0.141	0.038	0.096	0.027	-0.198	0.052	-
② 近い将来について、自分には具体的な理想がある	-0.047	†	0.083	0.054	0.053	-0.044	-0.018	0.254

**：有意水準1%、*：有意水準5%、†：有意水準10%（いずれも両側検定）。

①～②は7点尺度

学年が高い学生ほど特定の深めたい領域を明確に抱いている可能性は、項目②との関係からも指摘できるように思われる。2年生で値が多少小さくなっているものの、傾向としては学年が上がるほど近い将来の自らの理想像がより具体的になっている。このことは、専門的に学びたいことがはっきりすることと関連する内容であるように考えられる。

次に、変数毎に学修成果である GPA との関係を確認していく。GPA を除く各変数は、質問票回答者の考え方を述べているものであり、先に示したとおり「否定的」「中立的」「肯定的」の3つにまとめている。この3つのグループに分けて、それぞれのグループでの GPA の平均値を示したものが表5である。なお、アルバイトに関しては、そもそもアルバイトを行っていない学生は回答ができない質問内容であるため、「この3ヶ月間まったくアルバイトを行っていない」と回答した学生を表5の右端列にまとめている。

表5に示したように、各質問項目に対する回答者の考え方の違いを3つのグループに分け、それぞれのグループの GPA 平均値を比較してみると、「場合によっては、学習よりもアルバイトを優先しても仕方がないと感じる」(項目④) 学生たちほど、GPA が低い傾向が見られる。また、「試験前には、アルバイトの予定を入れないようにしている」(項目⑤) 学生たちほど高 GPA となっている。

グループ間で GPA の違いに統計的な違いが存在するかを確かめるために、各グループの平均値の差の検定を通じて確認したところ、統計的に有意な差が見られたところはいくつか存在した。

第一に、「アルバイト先で、頼りにされている」(項目③) という項目に対して、その通りであるといった肯定的な考え方をしている学生たちは、どちらともいえないと思っている学生たちと比べて平均 GPA が低く有意な差があることが10%水準で統計的に示された。同時に、肯定的な考え方の学生と全くアルバイトを行わない学生たちとの平均 GPA の差についても、同じく10%水準で統計的に有意であることが明らかになった。

表 5 態度別 GPA の平均値

	否定的	中立的	肯定的	アルバイトをしていない	
① アルバイト先から、急なシフト変更のお願いをよくされる	0.123 (118)	0.041 (232)	0.041 (117)		
② アルバイト先から何か頼まれると、断りづらく感じる	0.034 (104)	0.092 (196)	0.043 (167)		
③ アルバイト先で、頼りにされていると感じる	0.048 (34)	0.115 (263)	-0.021 (167)		0.166 (64)
④ 場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと感じる	0.239 (136)	0.003 (239)	-0.047 (91)		
⑤ 試験前には、アルバイトの予定を入れないようにしている	-0.024 (70)	0.018 (175)	0.129 (220)		
① 将来に必要な技能や知識を身につけるために、授業に取り組んでいる	0.012 (33)	0.050 (327)	0.134 (171)		
② 近い将来について、自分には具体的な理想がある	0.096 (83)	0.099 (293)	0.024 (152)		

上段：GPA (2015 年度単年度) の平均値 (下段：該当回答者数)

◆——◆ 平均の差の検定で 1% 有意

◆-----◆ 平均の差の検定で 10% 有意

※一部の回答がなされていない学生がいるため、項目毎に回答者総数は一致しない。

第二に、「場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がない」(項目④) と肯定的に考えている人々は、全くアルバイトを行わない学生たちと比べて 10% の有意水準で統計的に平均 GPA が低いことが分かった。また、否定的に捉えているグループとの間には 1% 水準で平均 GPA が低いことが明らかになった。さらに、この否定的に捉えているグループは、肯定的に捉えているグループとの間にも同じく 1% 水準で統計的な有意差をもって平均 GPA の差が存在することが示された。

このような違いの存在は直感的にも理解できるものである。表 3 での相関と併せて考えると、アルバイト先で頼りにされていると、依頼された事柄を断りづらく感じ、急なシフト変更のお願いにも対応せざるを得なくなると

いう可能性があろう。そうなれば、学習に振り向けられる時間が減ってしまつて、アルバイトで頼りにされるといふことに苛まれることがない学生と比べたときに、学修成果である GPA が低くなつてしまふということが考えられる。より直接的に学習時間が少なくなるのは、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと思つている学生であり、そのような考え方に否定的な学生との間に学修成果に差が生じることは自然なことのよふに思われる。

表5では将来像が具体的になつている程度と GPA との関係も示している。将来に必要な技能や知識を身につけるために授業に取り組んでいる学生の方が、そうではない学生に比べて平均 GPA が高いけれども、統計的に有意な関係ではなかつた。同様に統計的な有意差はないものの、近い将来について具体的な理想を持つている学生の方が平均的に GPA が低いといふ結果が見られた。

このことは、上述の学年が上がるほど将来についての理想が明確になる傾向が見られたこととも整合的であらう。もちろん、公認会計士や税理士をはじめとして、具体的に将来なりたい職業を抱いて入学する学生もあり、具体的な将来像を描いているかどうかは学年とは関係ない側面もある。ただ、GPA が平均的に低くなることを考えれば、自らの持つ将来像と関連する科目については深く学ぼうとして真剣に取り組むけれども、あまり関連がないと自らが考えてしまふ科目に対しては相対的に学習が不十分となり、履修科目全体の学修成果である GPA そのものは下がるといふ可能性が考えられる。

それでは、アルバイトに対する考え方が同じであつたとしても、具体的な将来像を描かれているか否かによつて学修成果は異なるのであらうか。将来像とアルバイトに対する考え方を同時に検討するために、二元配置の分散分析を行ったものが表6-1ならびに表6-2である。表5において変数毎の GPA を確認したものを、表6の2つの表ではアルバイトに対する態度別に将来像の具体度と GPA との関係を示したものになる。

表 6-1 態度別 GPA の交互作用

	① 将来に必要な技能や知識を身につけるために、授業に取り組んでいる			主効果	
	否定的	中立的	肯定的	アルバイトに 対する考え方	交互作用効果
① アルバイト先から、急なシフト変更のお願いをよくされる	否定的	0.117 (0.501)	0.161 (0.609)	0.447	1.238
	中立的	0.136 (0.525)	0.108 (0.540)		
	肯定的	-0.127 (1.012)	0.113 (0.517)		
アルバイトをしていない	-0.025 (0.453)	0.182 (0.489)	0.190 (0.545)		
② アルバイト先から何か頼まれると、断りづらく感じる	否定的	0.012 (0.371)	0.141 (0.489)	2.277	0.149
	中立的	0.622 (0.348)	0.032 (0.538)		
	肯定的	-0.136 (0.919)	-0.031 (0.569)		
アルバイトをしていない	-0.025 (0.453)	0.182 (0.489)	0.190 (0.545)		
③ アルバイト先で、頼りにされていると感じる	否定的	-0.196 (0.937)	0.075 (0.489)	1.161	0.935
	中立的	0.132 (0.440)	0.078 (0.517)		
	肯定的	0.017 (0.728)	-0.072 (0.583)		
アルバイトをしていない	-0.025 (0.453)	0.181 (0.502)	0.190 (0.545)		
④ 場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと感じる	否定的	0.298 (0.317)	0.266 (0.439)	3.549	0.355
	中立的	0.087 (0.759)	-0.035 (0.565)		
	肯定的	-0.167 (0.742)	-0.052 (0.499)		
アルバイトをしていない	-0.025 (0.453)	0.182 (0.489)	0.190 (0.545)		
⑤ 試験前には、アルバイトの予定を入れないようにしている	否定的	-0.116 (0.833)	-0.034 (0.584)	1.569	0.925
	中立的	-0.124 (0.934)	0.004 (0.545)		
	肯定的	0.132 (4.683)	0.081 (0.522)		
アルバイトをしていない	-0.025 (0.453)	0.182 (0.489)	0.148 (0.575)		

GPA (2015 年度単年度) の平均値・(括弧内は標準誤差)
 主効果ならびに交互作用効果の欄は F 値
 ↓ ← → 平均値の差の検定で 5% 有意 (Bonferroni の多重比較) ** : 有意水準 1%, * : 有意水準 5%, † : 有意水準 10%
 ◆-----◆ 平均値の差の検定で 10% 有意 (Bonferroni の多重比較)

表 6-2 態度別 GPA の交互作用

	② 近い将来について、自分には具体的な理想がある				主効果	
	否定的	中立的	肯定的	アルバイトに 対する考え	授業取り組み	交互作用効果
① アルバイト先から、急なシフト変更のお願いをよくされる	否定的	0.204 (0.519)	0.069 (0.579)			
	中立的	0.033 (0.531)	0.021 (0.610)	1.275	0.814	1.337
	肯定的	-0.129 (0.771)	0.114 (0.567)	0.007 (0.506)		
アルバイトをしていない	0.269 (0.504)	0.140 (0.524)	0.134 (0.484)			
② アルバイト先から何か頼まれると、断りづらく感じる	否定的	0.143 (0.474)	0.113 (0.456)	0.202 (0.589)	†	
	中立的	0.238 (0.404)	0.086 (0.549)	0.049 (0.562)	2.299	1.377
	肯定的	-0.187 (0.684)	0.095 (0.579)	0.078 (0.552)		2.231
アルバイトをしていない	0.269 (0.504)	0.140 (0.524)	0.134 (0.484)			
③ アルバイト先で、頼りにされていると感じる	否定的	-0.153 (0.761)	0.162 (0.568)	0.028 (0.672)	*	
	中立的	0.177 (0.439)	0.084 (0.537)	0.168 (0.508)	3.537	0.781
	肯定的	-0.049 (0.646)	0.098 (0.542)	0.134 (0.575)		1.514
アルバイトをしていない	0.269 (0.504)	0.142 (0.534)	0.134 (0.484)			
④ 場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと感じる	否定的	0.358 (0.373)	0.309 (0.460)	0.090 (0.494)	**	
	中立的	0.042 (0.527)	0.003 (0.576)	0.008 (0.638)	7.868	1.308
	肯定的	-0.241 (0.621)	0.074 (0.420)	0.079 (0.527)		1.457
アルバイトをしていない	0.269 (0.504)	0.140 (0.524)	0.134 (0.484)			
⑤ 試験前には、アルバイトの予定を入れたいようにしている	否定的	-0.011 (0.600)	0.088 (0.601)	0.220 (0.515)	*	
	中立的	-0.055 (0.734)	0.026 (0.552)	0.031 (0.585)	1.549	2.786
	肯定的	0.150 (0.428)	0.155 (0.507)	0.083 (0.556)		0.728
アルバイトをしていない	0.269 (0.504)	0.140 (0.524)	0.081 (0.524)			

GPA (2015 年度単年度)の平均値・(括弧内は標準誤差)

主効果ならびに交互作用効果の欄は F 値
 ← → 平均値の差の検定で 5% 有意 (Bonferroni の多重比較) ** : 有意水準 1%, * : 有意水準 5%, † : 有意水準 10%
 ◆ ◆ ◆ 平均値の差の検定で 10% 有意 (Bonferroni の多重比較)

ここで交互作用効果が生じているものを確認すると、項目②で示した「アルバイト先から何か頼まれると、断りづらく感じる」程度は、授業の取り組みや将来の具体像という他の項目との間に交互作用効果が生じて、学修成果である GPA のスコアが高くなることが示された。

Bonferroni の多重比較によって平均値の差が統計的に有意に生じている箇所を確認したところ、5%の有意水準で差が見られるところに言及すれば、次の二つにまとめられる。第一に、授業への取り組みが将来に必要な技能や知識を身につけるためであると回答している学生であっても、アルバイト先から何か頼まれても断りづらく感じることはないという学生であれば GPA の平均値が下がり、断りづらいつと感じる学生は逆に GPA の平均値が上がるという結果が見られた。第二に、近い将来について、自分には具体的な理想があると答えている学生であっても、アルバイト先から何か頼まれても断りづらく感じることはないという学生であれば、GPA の平均値が下がることが示された。

アルバイト先から何か頼まれたときに、どのように感じるのかは人それぞれであるけれども、その頼みを断りづらく感じることはないという学生は、割り切って考えられるだけの意思の強さを持っていると考えられる。そのような割り切りが、授業への取り組みに対して将来に必要な技能や知識のみ身につければよいという考え方にも適用されているならば、授業全般に熱心に取り組むのではなく、特定の自分の将来に直接関係するような科目にのみ熱心に学習するであろう。その結果として、履修科目全体の平均値である GPA が他の学生よりも低くなることは妥当な帰結として考えられる。今回の交互作用効果は限定的なものであるけれども、ここでの交互作用効果の解釈としても成り立つと思われる。自分には具体的な理想があるという学生も、同様の解釈が可能であろう。また、同じように考えれば、頼まれたことも含めて何でも取り組む学生ほど、将来に必要な技能や知識も広く身につけようとする態度を持っていて、GPA の平均値が高くなるという解釈が考えられる。

4. 考 察

本稿は、大学生の資質能力の向上には学習時間が影響を及ぼすという前提の下で、その学習時間に影響を及ぼすアルバイトに注目し、アルバイトに対する考え方と学修成果との関係を探索的に分析したものである。アルバイトを受け入れる状況におかれたり、受け入れざるを得ないと思う態度をもったりする学生は、GPA という広く一般に用いられている学修成果指標が低くなる傾向が分析の結果見られた。特に統計的に有意な差が生じている部分をあらためて取り上げれば、場合によっては、学習よりアルバイトを優先しても仕方がないと感じる学生は、GPA が低くなることが示された。また、弱い関係ながら、アルバイト先で頼りにされていると感じている学生ほど GPA が低いことも示された。

分析結果から見られた関係は、一般的に受け入れられるように思われる。場合によってはという限定付きではあるものの、学習よりアルバイトを優先させるという学生は、そのような限定があってもアルバイトを優先させることなく学習に重きを置く学生より学修成果が悪いという結果は自然な結果であろう。アルバイト先で頼りにされていると感じる学生は、その責任感ゆえにアルバイトに時間を割いてしまうことになれば、GPA が低くなることも理解可能である。ただし、頼りにされていると感じていることに関しては、統計的な有意水準が低かった。このことは、例えば、他のアルバイトには頼まれなようなある種の責任を伴うような作業に携わっているといった、頼りにされていることが必ずしもアルバイトに時間を割かれるということの意味しないものも含んでいることに起因していると考えられる。

アルバイトをしなければならない状況に学生がおかれている可能性ももちろん念頭に置きながら考えていかなければならないけれども、少なくとも大学生にとっての本分である勉強を疎かにしてしまう態度でアルバイトに接することは、学修成果という観点から望ましくないと言えるであろう。

う。4年間という貴重な時間を大学という教育機関に属して、自らの資質能力の向上に費やしているのだからこそ、その向上を第一に図るためにも学習を優先する態度を持つことが必要である。学習を優先させることが実際に学修成果につながることを統計的に明らかにしたことは、大学生生活において取るべき基本的なスタンスを明確にできたという意味で本稿はある種の貢献をしたと言えよう。

学修成果は、授業に対する取り組み姿勢や、近い将来についての具体的な理想の有無によっても影響を受けると考えられるものの、本稿の分析においてはその影響は必ずしも明確に示されなかった。ただし、本稿で主に着目したアルバイトに対する考え方との交互作用を検討したところ、一部の項目において交互作用の存在が確認された。交互作用の存在自体は、大学生としての姿勢が学修成果、ひいては将来に向けた資質向上に何らかの影響を与えることを示しているものだと考えられる。大学における学習姿勢や、大学卒業後の将来像を自ら描けているといった、大学生として持つておくべき事柄が学修成果に与える影響については、本分析だけでは十分とは言えないため、今後更に分析を加えていく必要がある。例えば、積田・渡部・宍戸（2016）では、大学生活における友人関係やコミュニケーションが学修成果に与える影響も検討しているが、大学生活の実態を示す基本的な内容について、交互作用も含めてより深い考察を行うことによって、更なる示唆を得られる可能性を示しているように思われる。

しかしながら、本稿で行った分析には様々な限界がある。特に注意すべきことの一つとして、本分析が回答した学生の所属する大学の経営学科に特有の問題である可能性がある。したがって、大学生全般についての言及として捉えることは不適切であるかもしれない。また、分析手法が洗練されていないために、十分な統計分析を行えていないことによって生じる過誤もある可能性も否定できない。

このような限界があるけれども、本稿で取り上げた質問票調査を通じて得られた分析結果は、少なくとも単なる印象を超え、学生の実態に関するある

側面についてのエビデンスを伴うものであるといえる。実態調査は、2年連続で実施済みであり、現在、新たな調査の準備を進めているところである。経年で実施する調査結果から、経年変化の分析を含めてさらなる知見を積み重ねていくと共に、学生の学修を深めることに寄与するインプリケーションが得られるよう継続的に取り組んでいくことが、筆者たちの今後の課題である。

謝辞

本稿は、学校法人武蔵野大学学院特別研究費の助成を受けて実施した研究の一部である。アンケート調査の実施にあたっては、武蔵野大学経済学部経営学科の先生方に多大なるご協力を賜った。この場を借りて深く御礼申し上げたい。

注

- 1 たとえば、Proactive Personality, Academic Engagement, and Academic Adjustment of University Students (17th International Conference on Education and Social Science, Taipei, Taiwan, December 2015).
- 2 口頭発表については、2015年11月2日武蔵野大学第4回FD研修における結果の一部発表や、同年12月1日・2日の両日にわたって実施したFD発表会「学修成果に寄与するための施策検討～経営学科『学生調査』による学生の実態把握から考える」、2016年1月14日に開催された2015年度第3回武蔵野大学政治経済研究所研究フォーラム「学生の成績推移に見られる特徴」などがある。
- 3 この内容は、2015年12月1日・2日にわたって実施したFD発表会で発表している。
- 4 日本の大学生が欧米の大学生に比べて勉強しないという議論では、2012年7月24日に開催された大学分科会（第108回）・大学教育部会（第20回）合同会議で配付された資料がしばしば引き合いに出される。
- 5 1年生は1月6日の1日のみで実施し、2～4年生については8名を除いて11月26日から12月21日までの約1ヶ月間で実施している。
- 6 もっとも、学科専門科目の開講授業数そのものが全体的に少ないという状況でもあるため、そこから生じている問題でもあるようにも思われる。

参考文献

- Gortner Lahmers, A., & Zulauf, C. R. (2000). Factors associated with academic time use and academic performance of college students: A recursive approach. *Journal of College Student Development*, 41, 544-556.
- 経済同友会 (2015)「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待～個人の資質能力を高め、組織を活かした競争力の向上～」
- 三保紀裕 (2013)「キャンパス外の活動が学修に与える影響について：アルバイトに着目した検討」『京都学園大学経済学部論集』23 (1), 107-118.
- 中室牧子 (2015)『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 大塚雄作・山田剛史 (2012)「大学教育評価」京都大学高等教育研究開発推進センター編『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版、165-215.
- Plant, E. A., Ericsson, K. A., Hill, L., & Asberg, K. (2005). Why study time does not predict grade point average across college students: Implications of deliberate practice for academic performance. *Contemporary Educational Psychology*, 30(1), 96-116.
- Ratelle, C. F., Senècal, C., Vallerand, R. J., & Provencher, P. (2005). The Relationship Between School-Leisure Conflict and Educational and Mental Health Indexes: A Motivational Analysis. *Journal of Applied Social Psychology*, 35 (9), 1800-1822.
- Schuman, H., Walsh, E., Olson, C., & Etheridge, B. (1985). Effort and reward: The assumption that college grades are affected by quantity of study. *Social Forces*, 63, 945-966
- 積田淳史、渡部博志、宍戸拓人 (2016)「大学生の学修・生活実態調査に関する考察」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』第6号、93-108.
- Wang, M. T., & Holcombe, R. (2010). Adolescents' perceptions of school environment, engagement, and academic achievement in middle school. *American Educational Research Journal*, 47(3), 633-662.
- 渡部博志、積田淳史、宍戸拓人 (2016)「学修成果の推移から見る学生の特徴」『政治経済研究所年報』第12号、139-164.